

ZEPHYROS

2001年
第10号



国立西洋美術館ニュース ゼフュロス
The National Museum of Western Art, Tokyo

鑑 賞 す る 側

目 次

鑑賞する側の視線で	2
館長 樺山 紘一	
ブラド美術館展 スペイン王室コレクションの美と栄光	4
主任研究官 田辺 幹之助	
子どもから楽しめる美術展 水の誘い.....	6
主任研究官 寺島 洋子	
デジタル技術とミュージアム	7
主任研究官 波多野 宏之	
2000年度新収作品	8
オノレ・ドーミエ版画作品について	9
展覧会と常設展	10
学芸課長 幸福 輝	
財団インフォメーション	11
ゼフュロスギャラリー	

ほほどこの美術館、博物館にも、休館日がある。ほとんどは月曜日がこれにあたる。当館もおなじである。だが、それをうっかり常識と思いこんでいると、痛い目にあうこともある。たとえば、ニューヨークの近代美術館（MOMA）は水曜日が休館である。これぐらいのことは、一般のガイドブックでも事前に調べておけばよいのに、ついこの前も失敗してしまった。

もっとも、臨時の休館という場合がある。じつは、当館も今年の8月初めに、止むをえない理由で2日間の臨時休館をした。施設の整備のために避けられなかった。できるだけの方法をもって予告をしたのだが、実際には暑い夏の太陽のなか、はるばる来館していただいた方もあったようだ。

臨時どころか、たいそう長期にわたって休館となる場合もある。改装や改築のためだ。当館でも、1996年から1997年まで、地階の展示場を増築するために、お休みをとらせていただいた。そこでも、ロダンをみるために来館して、無駄足となった方がおいでだったろう。ごく一部だけでも開館してはという意見もありうるだろうが、工事現場の危険を考えると、とても落ちついて鑑賞していただく状態ではなかったようだ。

われわれの姉妹館（同じ独立行政法人に属する、

の 視 線 で

館長 樺山 紘一



というのが正確だが）である東京国立近代美術館の本館は、約2年間の大改修を終えて、まもなく再開する。同館には、岸田劉生の著名な「麗子像」がある。ある日のこと、わたしはこれをみたいと思いつかつにもふらりと出掛けて行って、空振りをしてしまったものだ。

たとえば、アムステルダム国立美術館は、レンブラントやフェルメールの名作で知られるが、聞くところでは、ちかく大改築の予定だといい、かの「夜警」は近くの施設に疎開して展覧されるらしい。これなど、きちんと調べておかないと、はるばる日本から出掛けてがっかりということにも、なりかねない。ただでさえ、ヨーロッパの美術館には、長期の休館がおおいのだが。

あらましの美術館では、企画展というのを開催する。常設展はそのあいだは、撤去するか、またはごく狭い部分に限定する。企画展をめざしての来館を待っているのだが、他方で常設展を目標にこられた方はどうなるか。目当ての作品がみあたらずに、失望することもあるだろう。

いずれにしても、わたし自身もしばしば苦い思いをしてきたものだから、美術館の当事者としては、あらゆる努力をはらって、来館者の方がたに、ご迷惑のかからない道をさがしたい。なによりも、早く、

広く、はっきりとした休館情報を公開するのが必要だろう。できるだけ鑑賞する側の立場にたって運営したいと念じている。美術品は、公共の利用によってのみ、ほんとうの価値を発揮するのだから。

ここで、一言ご挨拶を申しあげるのだが、わたしは新任の館長である。まだまだ勉強中である。狭義の美術研究者ではなく、どちらかといえば、美術館の利用者であった者として、その視線で運営のありかたを模索していきたい。

休館日についても、また開館時間についても、いろいろのご意見がある。当館としても、困難な事情もあって、すぐに変更が可能とはかぎらないのだが、納得のゆく解決をめざしたい。専門家はもとよりのこと、市民のみなさんのご理解とご協力をえて、わが国における美術館のあらたな世紀を創りだすよう、全力をあげる所存である。くれぐれもよろしくと、お願い申しあげる次第である。

プラド美術館展 スペイン王室コレクションの美と栄光

スペイン美術の比類ないコレクションを誇るプラド美術館はさらに、16、17世紀を中心とするフランドルとヴェネチア絵画の重要な収集によってもその名を知られています。プラド美術館の収集のこのような広がり、美術館の前身のひとつで、現在でも収蔵品の核となっているスペイン王室コレクションの歴史と趣味を反映していると言ってもよいでしょう。ハプスブルクとブルボンのふたつのスペイン王朝の宮廷は、ベラスケスやゴヤといった画家たちに宮廷画家としての活動の場を与えるばかりではなく、ヨーロッパ各地から画家たちを招聘し、作品収集のために使節を派遣するなど、広汎な美術品収集活動を行っていました。宮廷はこのような活動を通じて多様な美術の潮流が交錯する国際的な美術センターとして機能し、さらにはスペインの画家たちにさま

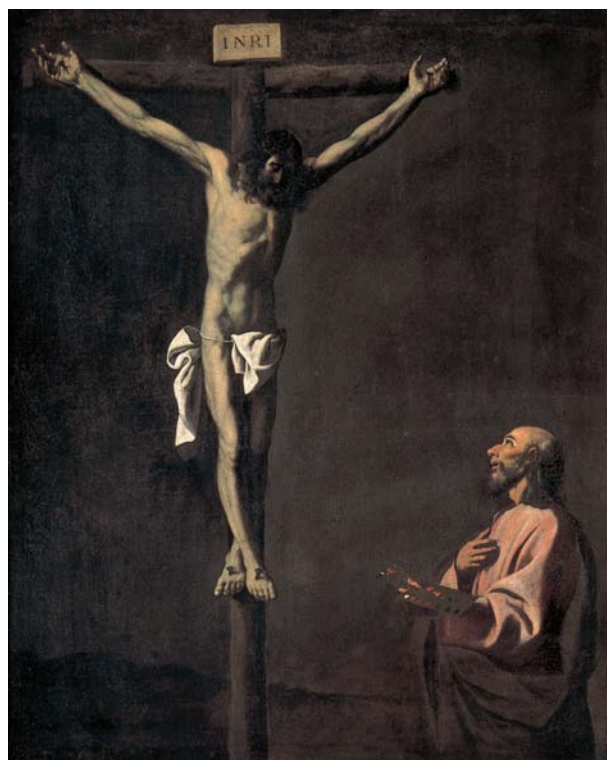
ざまなかたちの刺激を与えることで、スペイン美術の流れを推進する、ひとつの力ともなっていたのです。

5点のベラスケス、6点のゴヤを初めとする77点からなる本展の特徴は、このような歴史を背景とするプラド美術館のコレクションを紹介しつつ、スペイン美術の流れを、王室コレクションとの関わりを通じて追ってみようという点にあります。

展覧会は6つのセクションによって構成されていますが、その導入となる第1セクションに展示されるのは、プラドのコレクションの基礎を築き、16、17世紀の最盛期のスペインを統治したハプスブルク



ティツィアーノ
《スペインに救済される宗教》
1572／75年



フランシスコ・デ・スルバラン
《磔刑のキリストを描く聖ルカ》
1630／35年

会期：2002年3月5日(火)～6月16日(日)

主催：国立西洋美術館／国立プラド美術館／読売新聞社

朝の諸王と王族の、ベラスケスらの手になる肖像です。主としてこれらの諸王や王族によって収集され、あるいは彼等の営んだ宮殿の装飾に組み込まれていたヴェネチアやフランドルの画家たちの作品は、続く第2セクションに飾られます。ティツィアーノやティントレット、あるいはルーベンス、ヨルダーンズといった画家たちの作品からは、人文主義的な教養を背景とするハプスブルク家の洗練された宮廷趣味を窺うことができます。

エル・グレコの作品に始まる第3セクションは、リベラ、スルバラン、ムリーリョらの宗教画で構成されています。彼等の作品は同時代のフランドルやイタリア美術の様式を吸収しつつ、対抗宗教改革時代のスペイン独特の宗教画を生み出し、第2セクションに展示された華やかな宮廷美術と鋭い対照をなしています。さらに第4セクションには、宗教画

と並んで17世紀スペイン絵画の独自性を物語る、「ボデゴン」と呼ばれる厨房画を初めとする静物画と、まさにこの時代のスペイン美術を代表する宮廷画家ベラスケスの肖像画が展示されます。

第5セクションは、18世紀にスペイン王家となったブルボン朝の宮廷絵画と、その宮廷画家でもあったゴヤの作品によって構成されています。ハプスブルク朝時代の重厚な趣味に代わって、ここではフランス的な、新たなロ可可趣味を特徴とする宮廷美術が展開されますが、その一方でゴヤの後期の作品には、革命と戦争による近代の開始と宮廷が美術を主導する時代の終焉がはっきりと刻印されています。

本展の掉尾を飾る第6セクションでは、宮廷美術の時代の後、王室コレクションの主要部分がプラド美術館に移され公開されるようになった19世紀のスペイン美術の流れが概観されます。そこでは、ロマン主義、ジャポニズム、写実主義

といった新たな時代の芸術運動を、スペインの画家たちがどのように吸収したかが示されます。

スペイン美術を主題とする展覧会は日本でもこれまでもしばしば開催されてきましたが、プラド美術館そのものを紹介するのは今回が初めてです。その意味で本展はまさに、待望久しい展覧会だと言えることができると思います。

(主任研究官 田辺 幹之助)



フランシスコ・デ・ゴヤ
《日傘》
1777年

子どもから楽しめる美術展

いざな 水の誘い

会期：2001年9月4日(火)～11月4日(日)

[協力：大日本印刷株式会社]

'95年に子どものための美術展として始まったこの小企画展は、美術館が工事のため休館していた'96年と'97年には同じ上野公園内の東京国立博物館と共同で実施しました。リニューアル・オープンした後、'98～'99年は常設展示を利用した夏休み子どもプログラムを行い、2001年春、版画・素描の展示と小企画展にも利用できるギャラリーが整備され、秋に再び子どもから楽しめる美術展を開催することとなりました。文字通り、これまで子どもを中心としていた内容から、美術観賞は初心者という大人の方も一緒に楽しめるように、対象を広げ、多様なプログラムを用意しています。

今回は“水”がテーマです。水はとらえどころのない物体です。画家や芸術家は、海の波や川の流れ、雨の滴など、動きとともに形を変える水の瞬間の姿を、様々な形に表現してきました。また、静かな水面が鏡のように周囲の情景や光を反射する様子、存在自体を感じさせないその透明性などは、画家たちの創作意欲を刺激しました。さらに、水は生命の根源であることから豊穡や癒し、その無色透明な美しさから純粹無垢の象徴として、芸術の中で様々な寓意的表現がなされています。



ジャン＝マルク・ナティエ
《マリ＝アンリエット＝ベルトレ・ド・ブルヌフ夫人の肖像》
1739年



アマルリック・ワルター
《蜻蛉文小物入》
1920年～65年
北澤美術館

この小展覧会は、そうした水の様々な表現に注目して当館の所蔵作品をご覧いただくものですが、今回は他館の所蔵する工芸品や版画なども含め38件の作品によってよりヴァリエティに富んだ水の表現を紹介します。作品は3つのテーマに分類されています。＜動きと形＞では、クールベ、マルケ、ドニが描く海辺の表現を比較したり、油彩、版画、ドレスやガラスなどの工芸品に表わされた雨や流れる水の表現を見ます。

＜水面と透明感＞では、戸外の光に魅せられた印象派の画家モネが描く水面の表現や、中世からルネサンス期の宗教画の背景に描かれた透き通る池や水たまりの表現などを取りあげます。＜水の神話・水に隠されたメッセージ＞では、ギリシャ神話の海神、水の精に見立てて描かれた女性の肖像画や水の精をデザインした香水瓶など、また水によって想起される様々なイメージの作品が展示されます。

会期中は、無料のワークシートを常設展示室と展覧会会場の4点の作品の傍らに設置し、展覧会に出品されている作品だけでなく、常設展示されている他の作品についても、水の表現という視点から観賞できるようにしています。また、水に関連した創作・体験プログラム、講演会、コンサートなども企画し、様々なメディアを通して水とふれ合う機会も提供します。それによって異なる時代や作家によって表現された作品に対する理解や興味を持っていただければ幸いです。

(主任研究官 寺島 洋子)

デジタル技術とミュージアム

—情報・機器展示、セミナーによる公開プログラム—

会期:2001年11月13日(火)～12月2日(日)

[特別協力:凸版印刷株式会社]

美術作品や博物館資料の記録には、従来、模写や写真が用いられてきました。いわゆる銀塩鉛写真はそれが発明された19世紀半ばからこうした「複製」の中心的位置を占めています。他方、コンピュータにデジタル情報を蓄積し処理する技術も長足の進歩を遂げ、今日では美術館や博物館が所蔵する作品のデジタル画像を館内の端末やインターネットで公開することが一般化してきました。画像の表示技術としては、より高精細な画像や立体画像、さらにはVR（バーチャルリアリティ＝仮想現実）の技術により、見る者と対象が相互に係わり合い、ひとつの仮想のミュージアム空間を体験することもできるようになっています。

本来、ミュージアムは作品や標本などのオリジナルを収集・整理し、研究・保存し、展示する機関であり、その種類は美術作品を扱う美術館から各種博物館、動物園・水族館まで多様です。さらに地図や設計図、各種のスケッチなど画像資料という点では、図書館や各種の資料館、文書館も同様の資料を所蔵しています。「電子図書館」「電子博物館」が語られるように、館種を越えた情報利用が考えられる所以です。そこにはデジタル時代ならではの大きな可能性とともに、権利や倫理の問題など解決すべき課題も透けて見えます。

本プログラムでは、当館における試みを含む国内外の20余のシステムやプロジェクトを集め、主として画

像のデジタル化、蓄積、表示技術を中心として、その多様性の一端を各種ディスプレイやパネル、また関連機器、大型印刷物等で展示します。また、シンポジウムやセミナーを通じて、それらが「複製」の歴史の中でどういう位置を占め、ミュージアムの将来にどのような影響を及ぼしていくかを考えます。

まず、メイン展示は、「画像表現技術の諸相:CG、3D、VR」「デジタル印刷はどこまで可能か」「データの蓄積と検索・表示」「保存修復とデジタル画像」「聖書のデジタル化とその研究」「デジタル・アートセンターの現状」「複製—デジタル技術の光と影—」の7部構成。ほかに「DVDシアター」「インターネットコーナー」「レファレンスコーナー」を設ける予定です。次に、展示スペースに隣接した講堂では、大型スクリーンに「システーナ礼拝堂」を再現するVRの実演を行います。（第1週の特定の時間帯のみ）さらに、シンポジウムとして、「イコノテークの未来像:デジタル技術でミュージアムはどこまで変わるか」をテーマに内外の関係者による講演とパネルディスカッションを行います。＜イコノテーク＞は「画像の館」の意です。また、出展されたシステムやプロジェクトに関係者が分かりやすく解説するセミナーを開催します。

（主任研究官 波多野 宏之）



フィリップ・リッピ
《聖母子と二天使》
(DADDIプロジェクト)



画像一覧表示検索システム
(国際日本文化研究センター)

ジャン＝オノレ・フラゴナール 《丘を下る羊の群れ》

1763-65年頃
油彩・カンヴァス

南フランスの町グラスに生まれたフラゴナールは、18世紀フランスを代表する画家のひとりである。フラゴナールは最初真摯な静物画で名高いシャルダンに、次いで宮廷の華やかなロココ美術を代表するブーシェに教えを受けた。やがて1756年にはローマ留学を果たし、この地で4年の研鑽を積んだのである。この作品は、フラゴナールがこの第一回イタリア旅行（第二回



は1773-74年）から戻った1761年以降、本格的にパリにおける画家としての地歩を確立しようとしていた時期の作品である。やがて1765年には《コレスュスとカリロエ》（ルーヴル美術館）によって、アカデミーに準会員に推挙されることとなるフラゴナールであるが、イタリア風のみならず、フランドル＝オランダ風など、さまざまな画派の影響を見せる作品を描いているのがこの時期の特徴といえよう。雲間を漏れて降り注ぐ精妙な光の効果は、まさに北方の風景画の直接の影響を示し、他方、地形や動物、人物の風俗的描写は、イタリアの地で学んだ成果であろう。他方、岩場の横の急な坂道を下る羊の群れと羊飼いの一行を描いたこの作品では、光の効果はとりわけ目ざましい。画面中央の黒々とした大きな岩の量塊に対して手前の一団に当てられた明るい光線は、この絵にダイナミックなバロック的対照の妙をもたらしている。全体として、ロイスダールに学んだ劇的で精緻な光の効果が軸となっているが、柔らかな色彩の輝きと軽やかな筆の走りは、まさに、18世紀絵画独自の世界である。

アントワヌ・コワズヴォ 《ド・ヴィルヌーヴ・ダッシー夫人の胸像肖像》

1715年
大理石

アントワヌ・コワズヴォ（1640-1720）は17世紀フランスの彫刻芸術を代表する彫刻家のひとりである。その芸術家としての活動は同時代



Photo上野則宏

を生きた太陽王ルイ14世（1638-1715）の治世と重なる。この時代の特色のひとつは、胸像形式の肖像彫刻の隆盛にあると言ってもよいであろう。コワズヴォはその中の第一人者であった。やがて18世紀にウードンなどの手により頂点に達する「心理学的表現」は、初めてコワズヴォの手によって成されたのである。

2000年度の購入作品は、比較的珍しい女性の胸像である。衣紋の描写や、髪、頭部の描写は簡略化されているが、モデルの表情の繊細な捉え方には、比類のない表現力をもつこの彫刻家の特徴が端的に表れている。総じて、王家の人々の注文作品に見られるような「公的」性格は本作品には乏しく、むしろ親しみやすく穏やかな表現に留められているが、これは、この彫刻家の友人関係からの発注作品にしばしば見られる特徴といえる。

モデルの女性に関しては残念ながら僅かなことしか知られていない。カトリーヌの実家デュフェール・ド・ヴィルヌーヴ・ダッシー家は、17世紀においては父から子に受け継がれる名誉ある職業である王妃の「裳裾もち」を生業としていた。また、夫のクロード・ル・ルージュは1668年に国王の秘書参事官に任命され、1693年に死去している。

レンブラント・ハルメンス・ファン・レイン 《三本の木》

1643年
エッチング

1641年にレンブラントは、それまで中止していたエッチング制作を再開し、これまでの作品とは明らかに異なるテーマに取り組むようになった。しかし1641年を過ぎると、再びエッチングの制作量は減少し、1643年には《豚》と本作品

《三本の木》の二点のみしか制作されていない。この作品が特徴的なことは、風景画であるにもかかわらず、初期の風景描写では全く表わされなかった「空」が初めて描かれたことであろう。



レンブラントの作品中、空の描写がある風景エッチングは本作品を含めて2点しか存在しないことから、T・ラウレンツィアスは本作品の風景表現が戸外でのスケッチに基づかない、アトリエで構想された空の描写であると断じている。レンブラントはほとんどの風景版画を戸外で版に直接スケッチしたと推定されるので、ラウレンツィアスの意見が正しければ、本作品はアトリエの机上で制作された風景版画として希有な例となる。しかしC・キャンベルによると、この版画に広がる風景はハーレムダイクで、さらに後景にはアムステルダムが確認されることから、たとえ空の部分が構想に基づくとしても、長閑な風景描写は実景を基に制作されたことは間違いなさそうだ。そして、大きな版型、描かれたモチーフの雄大さなど、版画とは思えないようなモニュメンタル性が表現されていることから、この作品がレンブラントの版画作品の中でも最高傑作のひとつであることは疑う余地がない。その雄大さはレンブラントの後期の油彩画とも比肩するものであり、国立西洋美術館のレンブラントの版画コレクションを代表する一作となった。

オノレ・ドーミエ版画作品について

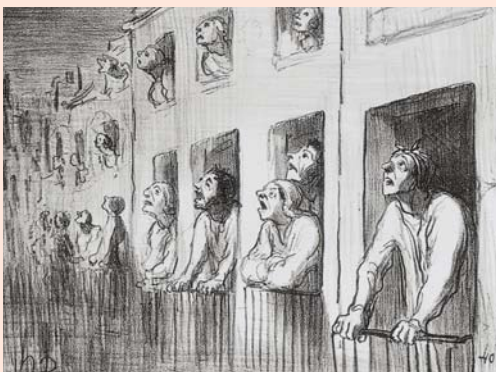
さまざまな意欲的な企画展を通して親しまれていた東京、池袋の東武美術館が残念ながら2001年3月をもって閉館しました。この機会に国立西洋美術館は、東武美術館が所蔵する1,701点のドーミエ作品をはじめとする19世紀

フランス版画のコレクションを、主要な部分を購入し、残りの未整理作品（およそ1,700点）を寄贈いただくという形で移管することになりました。

リトグラフを主体とするオノレ・ドーミエ（1808-1879）の版画作品群が、19世紀版画史の中で重要な位

置を占めていることは言うまでもありません。このコレクションはもともと、版画収集家として名高い故ピーター・モース氏（大森貝塚の発見者エドワード・モース氏の係累、1993年歿）の収集品でした。その主要部分（浮世絵関連）はその後墨田区の所蔵となり、他方、ドーミエを中心とする19世紀フランス版画のコレクションは東武美術館に一括購入されたという来歴もっています。

旧モース・コレクションのドーミエ作品は網羅的収集であることが特色です。ちなみに、東武美術館（東武鉄道株式会社）が、かつてモース・コレクションを購入した際には、モース氏からコレクションを散逸させないように、との要請を受けたといわれます。東武美術館がその門戸を閉じるにあたり、このコレクションを国立西洋美術館が一括所蔵できたことによって、故人の遺志もまた作品とともに生き永らえるに違いありません。



オノレ・ドーミエ
《1857年の彗星 7
パリの街で夜毎見られるようになった風景》
1857年
石版画

展覧会と常設展

どの美術館にも共通することですが、西洋美術館にもふたつの顔があります。多数の入場者を集め、時に、喧噪という言葉が似合う大きな展覧会開催者の顔と、これとは正反対に、静かで落ち着いた表情を見せる常設展運営者の顔です。前者は他の美術館などから借りてきた作品で構成される一時的な催事であり、後者はいつも美術館の同じ場所にある作品群の展示ということになります。ですから、このふたつはいろんな意味で対照的なものと思われがちです。

しかし、ちょっと冷静に考えれば、両者に密接な関係があることはすぐに理解されるはずです。ある展覧会がひとつの美術館で開催されるためには、他の美術館がその常設展示の一部を取り崩して所蔵品を貸し与えることが必要になるからです。つまり、ごく単純に言えば、ある美術館での展覧会開催は、他の美術館の常設展示を犠牲にして成り立っているということです。美術館どうしの貸借の関係が平等で、そこに共存共栄の関係がある限り、なんの問題も発生しません。ですが、現実はいささかとは正反対です。言うまでもなく、美術館の所蔵品は各館で分野も違えば、質量ともに大きく異なります。また、展覧会の開催に熱心な美術館もあれば、常設展示の整備を最優先と考える美術館もあります。作品の保存管理の考え方にもそれぞれの美術館で大きな隔りがあります。こうした中で展覧会が企画され、作品の貸借がおこなわれているのです。

かりに、作品を借りる可能性のない相手から作品の貸出依頼がきたら、美術館はどのような反応をするでしょうか。断るのが普通でしょう。欧米の重要な美術館から



ポール・シニャック
《サン＝トロペの港》
1901年頃
* グラン・パレ (2001.2.27～2001.5.28)
ゴッホ美術館 (2001.6.18～2001.9.9) へ貸出



クロード・モネ
《陽を浴びるポプラ並木》
1891年
*キャンベラ・ナショナル・ギャラリー
(2001.3.9～2001.6.11) へ貸出

見て、必ずしも魅力的な所蔵品をもっているとはいえない西洋美術館の貸出依頼は、残念ながら頻りに断られるのが現実です。一方、国内に目を転ずれば、西洋美術の所蔵品をもたない地方美術館からの貸出依頼に当館が時に消極的になってしまうのは、ある意味では仕方のないことかもしれません。自分になにも貸してはくれそうもない相手のために、自分の館の常設展示を犠牲にする必要はないという考えも成り立つからです。西洋美術館は、これまで欧米の諸美術館から歴大な数の作品を借りてきました。明らかに輸入超過です。ですから、欧米の諸美術館から貸出依頼がきた場合、当館はできるだけそれに答えるように努力しています。これまでの御礼の意味もありますが、同時にこれは将来への投資でもあります。

今年も、3月にはモネがオーストラリアに貸し出されましたし、その前にはシニャックの大作《サン＝トロペの港》がパリのグラン・パレとアムステルダム・ゴッホ美術館でのシニャック展に出品されました。シニャック展は2会場での開催でしたので、この作品は約半年間当館の常設展示の壁から消えていたことになります。当館の常設展示に愛着をもってくださる方から見れば、重要な作品が半年も鑑賞できない状況は憂慮すべき事態に映るかもしれません。しかし、誰しも一方的な受益者でいるわけにはいきません。西洋美術館が欧米の美術館から作品を借りて展覧会をおこなうためには、常設展示の一部を取り崩して貸し出すこともまた必要なのです。対照的な性格をもつ展覧会と常設展ですが、実は見えないところで繋がっているのです。(学芸課長 幸福 輝)

財団(西洋美術振興財団) インフォメーション

◆平成12年度の事業報告

1. 展覧会・講演会等の支援
 - ①国立西洋美術館と読売新聞社の共催展「ピカソ 子供の世界」の開催に協力
 - ②国立西洋美術館と東京新聞の共催展「レンブラント、フェルメールとその時代」の開催に協力
 - ③国立西洋美術館と現代歌人協会の企画展「西美をうたう－短歌と美術が会おうとき」の主催者に加わり開催に協力
 - ④国立西洋美術館特別展「死の舞踏－デュッセルドルフ大学版画素描コレクションによる」の主催者に加わり開催に協力
 - ⑤国立西洋美術館と日本経済新聞社の共催展「イタリア・ルネサンス 宮廷と都市の文化展」の開催に協力この他に各展覧会について行われた、記念講演会や記念シンポジウムなどの開催に支援を行った
2. 資料収集・調査研究等の支援
国立西洋美術館の情報資料の充実に資するため、外国図書資料、文献、雑誌等を購入寄贈
3. 普及広報・職員研修等の支援
職員研修等について、内外学会負担金をはじめ渉外用経費を支援
4. 出版物の刊行
 - ①特別展「死の舞踏」図録
 - ②企画展「西美をうたう」歌集
 - ③版画素描展示室改装記念「フランス素描名作選」小冊子
5. 機関誌の発行
国立西洋美術館ニュース「ゼフュロス」は、平成12年10月に第8号、平成13年3月に第9号を刊行
6. ミュージアム・ショップの運営
前号で紹介したショップの改装により、書籍の販売面積が拡張され、内容はいよいよ充実した
ミュージアム・ショップでは、独自の常設展関係の、或いは委託によるグッズの販売(約13社60種－絵はがき80種)
ブック・ショップにおいては、西洋美術関係とその関連和書を販売(約60社3,000種)
7. その他
今後予定される展覧会の内外の調査旅費などの経費の支援、国立西洋美術館を訪れる内外の美術館関係者や学識者と同館職員との意見交換、交流を支援

◆役員等人事

◎平成13年3月22日 理事会・評議員会

任期満了を迎え第4期の役員・評議員の改選が行われ、理事は全員再任、監事・評議員については、次のような異動があった(いずれも平成13年4月1日付)

監事 大谷利治、森脇英一(任期満了による退任)

(新任) 猪俣秀毅(公認会計士)、今村 正(税理士)

評議員 大岡 信(任期満了による退任)

高階秀爾、福原匡彦、三角哲生(理事兼任解除)

(新任) 清水嘉弘(東急文化村顧問)

辻佐保子(名古屋大学名誉教授)

西野嘉章(東京大学総合研究博物館教授)

任期満了により今回退任された皆様方に、これまでのご指導に対し、厚く御礼申し上げます

◎平成13年4月26日 理事 遠山敦子辞任(文部科学大臣就任のため)

◎平成13年6月28日 理事会・評議員会

平成13年4月1日付改選を受けて、理事長に高階秀爾、常務理事に福原匡彦を再選(理事会互選)

編集後記

フラメンコ、バエリア、闘牛、ピカソ、ミロ、ガウディ、光と影・・・スペインといえば漠然とこのようなイメージが浮かんできます。

「光と影」を帯びたプラド美術館の作品は、きっと私たちに魅了してくれることでしょう。

㊤



ディエゴ・ベラスケス

フェリペ4世

1626/28年

油彩・カンヴァス

57×44 cm

「ブラド美術館展

スペイン王室コレクションの美と栄光」

出品作品

● 誌名について

「ZEPHYROS」(ゼフュロス)はギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさと色さまざまな花々を運ぶ春の風をさします。

ZEPHYROS

国立西洋美術館ニュース
ゼフュロス

ZEPHYROS 第10号

印刷発行日 平成13年10月19日(年2回発行)

編集 国立西洋美術館

印刷 株式会社 アイネット

発行者 財団法人 西洋美術振興財団

〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

国立西洋美術館内

TEL / FAX 03-5685-2122